

き こ ない ちやう
木古内町

か め が わ
亀川5遺跡

— 高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 28 年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

木古内町

亀川5遺跡

— 高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成26年度に実施した木古内町亀川5遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の報告に関する遺物整理、本書の執筆、遺構図の作成は皆川洋一、立田 理が担当した。
4. 調査写真は立田、佐藤和雄、谷島由貴が撮影し、遺物写真は第1調査部第1調査課中山昭夫の協力を得て立田が行った。
5. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導、御協力をいただいた。

北海道教育委員会

国土交通省北海道開発局函館開発建設部、

(以下五十音順、敬称略)

阿部千春、石井淳平、大谷茂之、落合治彦、木元 豊、久保 泰、斉藤邦典、
佐藤智雄・佐藤雄生、柴田信一、鈴木克彦、高橋 毅、高橋豊彦、竹田 聡、田原良信、
塚田直哉、坪井睦美、寺崎康史、時田太郎、長谷部一弘、福田裕二、野村祐一、前田正憲、
宮本雅通、森 靖裕、八重柏 誠、横山英介、吉田 力、山田 央

記号等の説明

- 本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。
P：土坑 TP：Tピット F：焼土 FC：フレイク・チップ集中域。
- 遺構図の縮尺は原則として40分の1である。その他の縮尺を用いるものはスケールを付した。
- 遺構平面図の小数字は標高（単位m）を表している。
- 基本土層図、遺構の土層断面図に表記した数字は、標高（単位m）を示している。
- 基本土層はローマ数字、それ以外の土層はアラビア数字を用いて表した。
- 遺構の規模は、「確認面の長軸長×短軸長、床面（坑底面）の長軸長×短軸長/確認面からの最大深」を単位mで示してある。なお、一部破壊されているものは数値に（ ）を付した。
- 火山灰について以下の略号を用いている部分がある。
これらは層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行っていない。
B-Tm：白頭山・苫小牧火山灰（10世紀降下）
- 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。
これ以外の縮尺を用いる場合にはスケールを付した。
遺 構 1：40 遺物出土状況 1：20 土器拓本 1：3
剥片石器 1：2 礫 石 器 1：3
- 石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。なお、破損しているものについては、現存の最大幅を（ ）で示した。
- 遺構図で用いた方位は真北である。
- 遺物実測図中でたたき痕はv—v、すり痕は|—|で範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。
- 文献の引用中、(財)北海道埋蔵文化財センター発行調査報告書については、シリーズ名を略し、(北埋調報〇〇〇)と記した。
- 石器の石材について、一覧表について以下の略号を用いた。
Sa：砂岩、Sh：頁岩、S.Sh：珪質頁岩、S.W：珪化岩、Ob：黒曜石、Ch：チャート、Qua：珪岩、
Ag：メノウ、MS：泥岩、Tu：凝灰岩、Rh：流紋岩、Da：デイサイト、An：安山岩、
Bs：玄武岩、Sc：片岩、

目 次

例 言

記号等の説明

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

I 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	1
5 調査結果の概要	2
6 本書の内容	2

II 遺跡の位置と環境

1 調査の方法	3
2 発掘区の設定	3
3 調査方法	3
4 遺物整理の方法	4
5 遺物の分類	5
6 基本層序	5

III 遺跡周辺の概要

1 地形・地質	7
2 周辺の遺跡	8

IV 遺構と出土遺物

1 概要	11
2 土坑 (P)・陥し穴 (TP)	11
3 焼土 (F)	13
4 フレイク・チップ集中域 (FC)	15
5 包含層出土の土器	19
6 包含層出土の石器等	20

写真図版

挿 図 目 次

図Ⅱ-1 調査区設定図	3	図Ⅳ-4 遺構 (3)	16
図Ⅱ-2 調査方法図	4	図Ⅳ-5 遺構出土の遺物	17
図Ⅱ-3 調査区内の土層	6	図Ⅳ-6 包含層出土の土器	19
図Ⅲ-1 木古内町と周辺の遺跡	7	図Ⅳ-7 包含層出土の石器 (1)	21
図Ⅲ-2 亀川周辺の遺跡	9	図Ⅳ-8 包含層出土の石器 (2)	22
図Ⅳ-1 遺構位置図	11	図Ⅳ-9 グリッド別遺物出土状況 (1)	24
図Ⅳ-2 遺構 (1)	12	図Ⅳ-10 グリッド別遺物出土状況 (2)	25
図Ⅳ-3 遺構 (2)	14	図Ⅳ-11 グリッド別遺物出土状況 (3)	26

表 目 次

表Ⅰ-1 出土遺物点数一覧	2	表Ⅳ-2 接合作業結果一覧	18
表Ⅱ-1 基本土層	5	表Ⅳ-3 掲載土器一覧	19
表Ⅳ-1 遺構一覧	18	表Ⅳ-4 掲載石器一覧	23

図 版 目 次

図版 1 調査風景 (北東から) 調査風景 (北から)	図版 4 TP-2 土層断面 (南西から) TP-2 完掘 (南東から) TP-3 土層断面 (南東から) TP-3 完掘 (南から) F-1 検出 (南から) F-2 土層断面 (南から)
図版 2 A地区 完掘 (北から) B地区 完掘 (北から)	図版 5 FC-1 調査風景 (東から) FC-2 検出 (南から) FC-3 検出 (北西から)
図版 3 P-1 土層断面 (南から) P-1 完掘 (西から) P-2 土層断面 (南西から) P-2 土層断面 (東から) TP-1 土層断面 (南から) TP-1 完掘 (南から)	図版 6 遺構出土の石器・包含層出土の土器 図版 7 包含層出土の石器

I 緒 言

1 調査要項

事業名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	国土交通省北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
現地調査期間	平成26年7月22日～平成26年10月31日
整理期間	平成28年4月1日～平成29年3月31日
遺跡名	亀川5遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-05-54）
所在地	北海道上磯郡木古内町字亀川220-2、227-2
調査面積	6,474㎡

2 調査体制

平成26年度

第1調査部長	千葉英一
第4調査課課長	皆川洋一（発掘担当者）
主査	立田 理（発掘担当者）
主任	佐藤和雄
主任	谷島由貴

平成28年度

第1調査部長	長沼 孝
第4調査課課長	皆川洋一（整理担当者）
主査	藤井 浩
主査	鈴木宏行
主査	直江康雄
主査	大泰司統

3 調査に至る経緯

高規格幹線道路「函館江差自動車道」は、函館インターチェンジ（以下ICとする）から北斗市・木古内町・上ノ国町を経由し、江差町に至る延長約70kmの自動車専用道路である。北海道縦貫自動車道、函館新道と接続し道央圏と道南圏を結ぶ高規格幹線道路となるものである。平成24年3月24日より北斗富川IC～北斗茂辺地ICが供用され、平成29年1月現在、北斗茂辺地IC～木古内IC（仮称）までの茂辺地木古内道路の建設事業が行われている。

平成11年、国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下「函館開発建設部」）は、函館江差自動車道、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会（以下「道教委」）に提出した。これを受けて道教委は、木古内町字大釜谷から字大平までの15地点に於いて所在確認調査が必要と通知した。亀川5遺跡における範囲確認調査は平成25年11月に行われた。結果約6,000㎡について発掘調査が必要と判断された。

4 調査の概要

亀川5遺跡は調査区至近にハイタカが営巣していた。調査による生態への影響を避けるため平成26年9月から調査する予定であった。しかし、7月中旬の生態調査によりハイタカが巣を放棄していることが判明したため予定を繰り上げて調査が可能となった。7月22日より準備を行い、8月1日より調査を開始した。悪天候の影響も少なく順調に調査が進行し、平成26年10月30日にすべての調査を終了した。

整理作業は平成28年4月1日から平成29年3月31日にわたり、土器接合作業および石器実測作業、報告書編集作業、および収納作業を行った。

5 調査結果の概要

検出された遺構は、土坑2基、焼土1か所、Tピット3基、フレイク・チップ集中域3か所である。遺物は総計で1,048点出土した。内訳は下表のとおりである。

表 I - 1 出土遺物点数一覧

遺物名	土器				石 器 等								総計	
	IV a	V b	石 鏃	つまみ付きナイフ	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	石 核	たたき石	原石	鏢		礫片
遺構	0	0	0	0	0	1	1	645	0	1	0	1	3	652
包含層	95	43	3	5	19	9	10	173	2	0	1	18	18	396
計	95	43	3	5	19	10	11	818	2	1	1	19	21	1,048

6 本書の内容

本書は、平成26年度に行われた木古内町亀川5遺跡の調査結果の内容を報告するものである。各章の内容は、I章に調査に至る経緯と概要について、II章に調査の方法について、III章に周辺の遺跡について、IV章では遺構と出土遺物について記す。

II 調査の方法

1 調査の方法

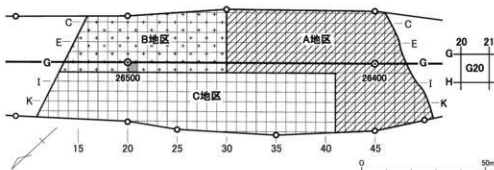
調査面積6,146㎡のうち通常調査は3,910㎡、遺構確認調査が2,236㎡であった。調査後の排土を調査区内に仮置きしなくてはならないため、通常調査部分を二分し遺構確認区と合わせ三つの地区に分け調査を行う計画を立てた。予想遺構出現率の高い順に段丘先端側（30ライン以南：A地区）、ついで段丘平坦面（30ライン以北：B地区）、最後に遺構確認区（C地区）と、終了した地区に排土を移動させて調査を行うものである（図II-1）。

2 発掘区の設定

発掘区は4×4mとし、アルファベット大文字と数字の組み合わせで表示した。設定基準は、両館開建の設定した道路中心点P-26,400とP-26,500を結んだ直線を利用している。それに直交する線を加えて方眼とした（図II-1）。調査区全面に数字と文字を付与できるように、中心点P-26,400をG20とした。中心線に平行な線にはアルファベットを、それに直交する線には数字を与え、東を基点として設定した。設定に利用した中心点P-26,400とP-26,500の世界測地系による座標は、平面直角座標第X1系に基づき以下の数値となっている。

P-26,400 (G20)	X=-253,757,050	Y=22,192,709
P-26,500 (G45)	X=-253,813,766	Y=22,110,348

発掘区の呼称は区画の東の交点で表した。例えばGラインと30ラインの交点の東側がG30区ということになる。なお遺構、土層、遺物出土状況などの標高の測定にあたって使用した基準点は、3級基準点H12-3085（標高78.493m）である。



図II-1 グリッド設定図

3 調査方法

(1) 包含層調査

通常の発掘区であるA地区、B地区の調査は、I、II層とした黒～黒褐色土をバックフォーで除去し、次に包含層であるIII層、黒褐色土を人力で掘り下げた。遺物出土点数に応じて道具を替え、多いところでは移植ごて、少ない場合はスコップ、ジョレンを用いている。全体の11.1%を調査した時点で遺物の出土がほとんどみられない地区（図II-2参照）、および遺構確認区（C地区）では、I～III層をバックフォーで、IV層とした黒褐色土の漸移層をスコップ、ジョレンを用いて除去し、V層とした黄褐色土の上面を精査し遺構の有無を確認した。

(2) 遺構調査

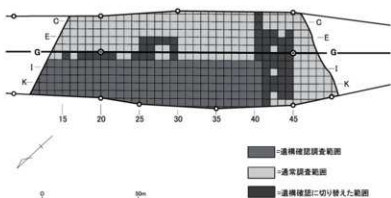
遺構はⅢ層下部またはⅣ～Ⅴ層で精査し検出作業を行った。検出後は移植ごてを用いて坑底を確認し、土層断面図の記録を作成したのち全体を掘り下げて完掘している。

なおフレイク・チップ集中域については、遺物を残して包含層を掘り込み、比較的まとまって出土する状態を認識したのち範囲を囲み番号を付した。

4 遺物整理の方法

(1) 図面

調査においては、遺構、有意な遺物の出土状況、また最終面測量毎に図面を作成した。遺構は原則縮尺20分の1で平面図、断面図を作成した。これらは調整して素図を作成し、この素図に墨入れをしたものを報告書の版下としている。



図Ⅱ-2 調査方法

(2) 写真

発掘現場での撮影はブローニサイズのカメラを主とし、デジタルカメラを整理用データ撮影に用いた。主に撮影対象としたものは、遺構、遺構の遺物出土状況である。

撮影に用いた機材はMamiya社製RZ67PRO IIである。フィルムは、富士フィルム社フジPROVIA100F、NEOPAN ACROS100を使用した。

室内の撮影はデジタルカメラ、シグマDP3を用いた。俯瞰撮影にあたってはトヨ・無影撮影台を使用した。露出計はセコニック社製L-408、ストロボはコメット社製CB-2400a、CLX-25miniHである。

(3) 遺物

一次整理：出土した遺物は、水洗ののち、土器、石器にわけ、分類を行った。分類された遺物は、それぞれ遺物カードを付し、グリッドごとに土器は古い順、石器は概ね分類順に並べて番号を記した。その番号を遺物番号とした。この遺物カードの情報をパソコン（マイクロソフト社、エクセル）に入力し、遺物点数の集計を行なった。すべての遺物に以下のように注記した。

遺構出土遺物	遺跡名	遺構名	ハイフン	遺物番号	層位
	カメ5	P-1	-	20	Ⅱ
包含層出土遺物	遺跡名	グリッド	ハイフン	遺物番号	層位
	カメ5	C8	-	44	Ⅲ

二次整理：土器は注記の後、接合作業を行なった。口縁から底部まで接合したのものや、文様が明確なものを選出して図化のための復元作業を行なった。石器は器種毎に形態分類し、全体を把握できるよう実測する遺物を抽出した。また、フレイク・チップ集中域から出土した遺物を中心に接合作業を試みた。接合資料のうち1点を図化している。

(4) 収納・保管

本報告に掲載された遺物は、ポリエチレン袋に個別に入れ、掲載番号、掲載図を付し、59×39×15 cmのプラスチックコンテナ（サンボックス製 36-2B）に収納した。その他の遺物は報告書名、分類内容を明記し同コンテナに収納した。コンテナには遺跡名、報告書名、分類名、収納番号を記したラベルを貼り、収納台帳を作成した。これらの遺物は報告後、木古内町で保管する。

5 遺物の分類

(1) 土器

出土遺物のうち、土器は縄文時代早期をⅠ、前期をⅡ、中期Ⅲ、後期Ⅳ、晩期をⅤ群とし、続く続縄文時代をⅥ群、擦文文化期をⅦとした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）あるいは、前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）に分類した。

Ⅰ群 [縄文時代早期の土器群] = 当調査では出土していない。

Ⅱ群 [縄文時代前期の土器群] = 当調査では出土していない。

Ⅲ群 [縄文時代中期の土器群] = 当調査では出土していない。

Ⅳ群 [縄文時代後期の土器]

a類：天祐寺式、涌元Ⅰ、Ⅱ式、トリサキ式、入江式、白坂3式に相当するもの

b類：ウサクマイC式、手輪式に相当するもの=当調査では出土していない

c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの=当調査では出土していない

Ⅴ群 [縄文時代晩期の土器群]

a類：北斗市茂辺地遺跡出土資料に相当するもの=当調査では出土していない

b類：聖山Ⅰ、Ⅱ式に相当するもの

Ⅵ群 [続縄文時代の土器群] = 当調査では出土していない

Ⅶ群 [擦文文化期の土器群] = 当調査では出土していない

(2) 石器等

石器等は、剥片石器に関連するものについて、石鎌、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石核、原石に分類した。礫石器に関連するものについて、たたき石、加工痕ある礫、礫、礫片等に分類した。

6 基本層序

本遺跡の土層は、色調などの特徴から以下のように区分した。

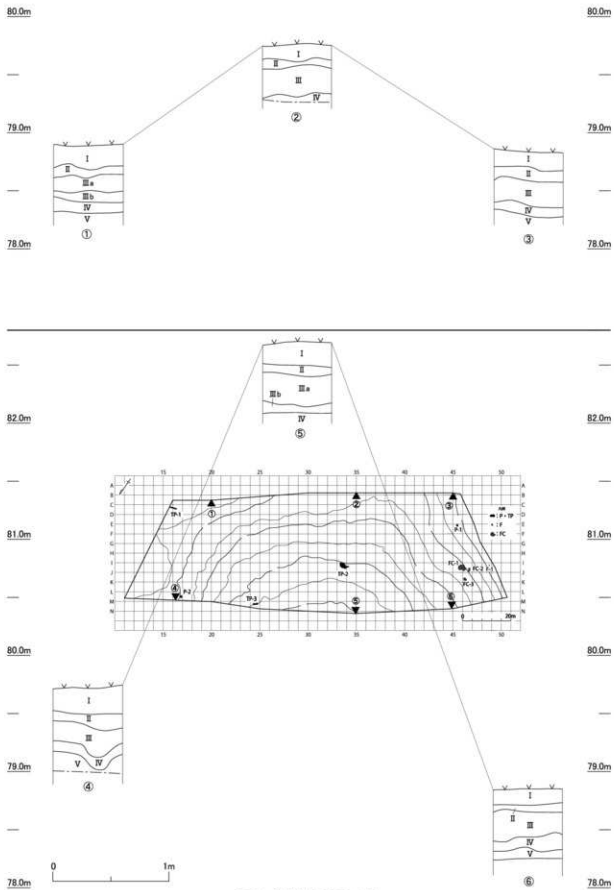
Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：黒褐色土（やや赤みを帯びる）、Ⅲ層：黒褐色土（漸移層）Ⅳ層：褐色土。

遺物包含層はⅢ層である。Ⅱ層中にB-Tmとみられる褐色シルトの火山灰が断片的に確認できる。

なお基本土層を含めた全ての土層の色調について、『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）を用い、粘性の有無、固さ、加えて混入物の種類、大きさ、マトリックスに対する割合について記述した。図Ⅱ-3は調査区の土層の様子である。層位の詳細は表Ⅱ-1のとおりである。

表Ⅱ-1 基本土層

Ⅰ	10YR1.7/1	黒色	粘性なし	しまりなし
Ⅱ	10YR2/2	黒褐色	粘性なし	ややしまりあり
Ⅲ	10YR2/2	黒褐色	粘性なし	ややしまりあり
Ⅲa	10YR2/2	黒褐色	やや粘性あり	ややしまりあり
Ⅲb	10YR2/3	黒褐色	やや粘性あり	ややしまりあり
Ⅳ	10YR2/3	黒褐色	粘性なし	しまりなし
Ⅴ	10YR4/4	褐色	やや粘性あり	しまりなし



図Ⅱ-3 調査区内の土層

遺跡はこうち高位の段丘に立地している。遺跡の周囲は、沖合で咸臨丸が座礁、沈没したことで有名なサラキ岬がある。遺跡名でもある亀川は岬の東側付け根を流れている。亀川の名称について古い記録はないが、対岸の地名「泉沢」は亀川の様子にちなんでつけられた名称である。泉沢はもともと「シュシュボッケ＝柳の陰（下）」という地名であったが、350年ほど前には鮭がまるで泉が湧くように多く遡上したために、泉沢と呼ばれるようになったといわれている（木古内町1982）。

2 周辺の遺跡

木古内町には、平成27（2015）年4月時点で、旧石器時代から縄文文化期までの55か所の遺跡がある。当センターが行った木古内2遺跡、蛇内2遺跡、大平・大平4遺跡、札蒔5遺跡の報文において、平成26年度に新規に登録された3遺跡を除く52遺跡について一覧表で紹介されている（北理調報278、280、281、292、294）。今回の報告においては、この新たな3遺跡を紹介することに加え、当地で検出例の多い縄文時代中期後半から後期前葉の資料について述べることにする。

新登録の遺跡

3遺跡は、釜谷10遺跡、札蒔8遺跡と本遺跡である。釜谷10遺跡は昨年度報告された釜谷8遺跡と同一の尾根上に位置する。札蒔8遺跡は札蒔5遺跡と町道を挟んで対面にあたる立地となっている。いずれも函館江差自動車道の用地内に存在する遺跡である（図III-1、2）。

本遺跡以外の二者は、隣接する各遺跡と同じ出土遺物がある。釜谷10遺跡は試掘調査でトリサキ～白坂3式相当の遺物が多く出土している。やや時期が下るが、釜谷8遺跡の南東端に検出された涌元式期の集落が延長しているものとみられる。札蒔8遺跡は、隣接する札蒔5遺跡で検出された縄文時代前期後半、円筒下層c～d式期の集落跡の延長とみられる。札蒔5遺跡の総括では周囲に盛土遺構は存在しないとされたが、札蒔8遺跡で2か所検出されたそれは5遺跡と一連となる盛土遺構と解釈してよさそうである。

縄文時代中期後半～後期前葉

町内で知られる遺跡は多いが、遺物の示す時期にはやや偏りがある。検出例が多い時期は2時期あり、前期後半と中期後半～後期前葉。土器型式では前者が円筒下層式、後者が大安在B式～煉瓦台式。天祐寺～涌元式に至る時期である。円筒下層式については、石器製作跡に関連して釜谷8遺跡の報告で若干の説明をした（北理調報305）。今回は、後者の中期後半～後期前半の当地の様相について、土器型式を辿って簡単に触れておく。

大安在B式～ノダツⅡ式期

大釜谷3遺跡では当該期の3軒の住居様遺構を検出している。土坑38Pは、長軸2mに満たない卵形の平面形であるが、先端ビットを持つ小型の住居とみられる。覆土出土の復元個体は、大安在B式の最古段階のものである。1号住居跡、1号堅穴とされる2軒は出土土器から次段階のもものとみられる。1号住居跡は長軸約6.5mの楕円形の平面形、先端ビットと方形の石組炉を持つ典型的なものである。中央には柱穴よりも規模の大きなビットを有する。1号堅穴は2mに満たない規模であるが、軸の方向と規模は38Pと同一であるため、関連のあるものと想定できる。

蛇内遺跡H-3は、長軸2.5mほどの楕円形の住居である。ほぼ中央に地床炉を設ける。住居は南北に軸を持つが、南側の壁際にやや古い段階に相当する完形土器が2個体、北側の柱穴付近からつぶれた状態の1個体が出土している。調査区は前期後半～中期前半の円筒下層・上層式が出土しており、本住居は北西側に流れる蛇内川支流に沿って1軒のみ検出されている。

新道4遺跡は合計で8軒の当該期の住居が検出されている。概ね大安在B式に相当するものは5軒

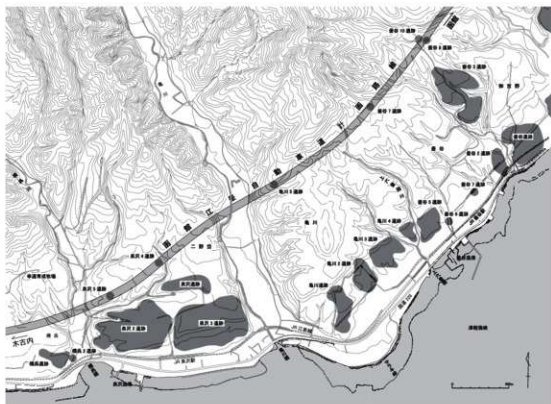
である。GH-6は最も古い段階のものである。長軸約4mの一边が直線となる楕円形を平面形とする。壁際に周溝があるが、丸みを帯びた先端部は途切れている。炉は地床炉が長軸上中心付近に3か所検出される。BH-9もこれとほぼ同じ形態の住居で、床面から土器が出土している。BH-2は長軸3.5mの楕円形の住居である。中央に位置する土坑から石皿が出土し、土坑に接して地床炉が検出されている。形態は蛇内遺跡H-3に類似する。覆土から土器上半が一括出土している。なお住居とされていないが、BP-9は直径約2mの円形の土坑であるが、報告者も住居の可能性を指摘しており、床面から底部を欠いた土器が復元されている。CH-4は長軸3.7mの卵形の住居である。炉は方形を呈する石圍炉で、一部土器片を利用している。先端ビットはないが卵形の典型的な住居跡である。土器は判断しづらいが、本群もしくは後続するノダツプⅡ式とみられる。

新道4遺跡のノダツプⅡ式に相当する住居は1軒である。BH-11は長軸3.11mの卵形の住居である。炉はやや角のある楕円形に囲む配石がみられ、かなり先端に寄った位置で検出されている。炉の周囲の床は硬化しており、当期とみられる土器が出土している。

煉瓦台式期

新道4遺跡FH-1は先端部を欠損するが卵形とみられる住居である。炉は中央からやや先端よりにつくられているが、平面形が中央付近でくびれているため、増改築が行われた可能性も指摘されている。炉の周囲は硬化面が検出されている。石皿を伴っているが、石組炉であったかどうかは定かではない。

蛇内2遺跡H-2は、長軸約3.5mの卵形の平面形をもつ住居である。炉は破壊されているが、石組を持つものとみられ、先端ビットらしきくぼみも確認できる。床面からは煉瓦台式の胴部上半と中の平3式土器が出土している。



図Ⅲ-2 亀川周辺の遺跡

天祐寺・涌元式期

泉沢2遺跡A地区では、天祐寺式期の住居跡が4軒検出されている。いずれも楕円形～円形の平面形で掘り込みが浅く、中心から外れた位置に礎を概ね円形に配した石組炉がある形態となっている。橋興川に注ぐ沢で区切られた尾根上の部分に位置している。

釜谷8遺跡では、涌元式期の住居2軒が検出されている。H-1は直径約3mのほぼ円形の平面形で中心からやや外れて円形の石組炉を持つ。H-2は長軸約4mの楕円形で中心に地床炉を持つものである。H-2は馴染土様の黄褐色土で埋められており、より古い形状であることと整合的である。

中期後半～後期初頭の変遷

新道4遺跡の例からすると、沢ごとに2～3軒を単位とする集落をつくり、土器型式ごとに住居の構造を変えていく形が見て取れる。この単位にも詳細には若干の時期差があり、同時存在した規模はさらに小さいのかもしれない。この住居の様相は榎林期に起源を持つと想像されるが、大安在B式から煉瓦台式まで継続している。以降の天祐寺・涌元式に至っては湯の里1遺跡のような拠点集落を除いて居住地を変更しているようであり、小規模集落は断絶がみられる場合が多い。

住居の形態は、大安在B式にあっては見晴町式以来の伝統的形態である一辺が直線となる楕円形の住居を用いている。しかし埋設炉ではなく地床炉を用いる点はこの地域の特徴であるかもしれない。ノダツII式にあっては卵形の平面形の住居で先端ビット、方形の石組炉で特徴づけられる住居を用いる時期である。当地でもその例にもれないが、煉瓦台式を境に天祐寺式期には円形に近い石組炉を持つ浅い掘り込みの住居へと変化している。

木古内町において当該期には土器型式に伴い住居構造も変化するとともに、居住地も変化していることがわかった。当該期は貝塚の形成や大規模な削平・盛土遺構が形成され始める時期である。このような大きな変化の様相を理解するには、上記のような小規模集落を詳細に検討することが必要であろう。

引用文献

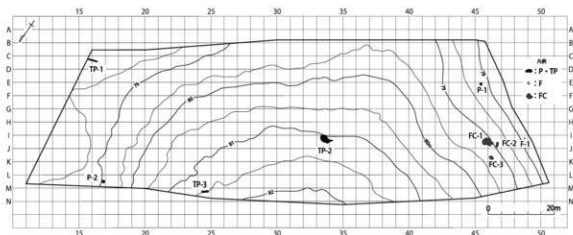
- 小山正忠・竹原秀雄 2004 『標準土色帖』26版 日本色研事業株式会社
木古内町史編纂委員会 1982 『木古内町史』 木古内町
通産省工業技術院地質調査所 1979 『木古内地域の地質』 地域地質調査報告5 5万分の1 図解
木古内町教育委員会 1998a 『亀川2遺跡』
木古内町教育委員会 1998b 『亀川3遺跡』
木古内町教育委員会 2003b 『泉沢2遺跡 B地点』
木古内町教育委員会 2003c 『泉沢2遺跡 C地点』
木古内町教育委員会 2003d 『大釜谷3遺跡』
木古内町教育委員会 2004 『蛇内遺跡』
(財)北海道埋蔵文化財センター1986 『木古内町 建川1・新道4遺跡』 北理調報33
(財)北海道埋蔵文化財センター1987 『木古内町 建川2・新道4遺跡』 北理調報43
(財)北海道埋蔵文化財センター 『木古内町 新道4遺跡』 北理調報52
(財)北海道埋蔵文化財センター2011b 『木古内町 大平遺跡・大平4遺跡』 北理調報280
(財)北海道埋蔵文化財センター2011c 『木古内町 蛇内2遺跡』 北理調報281
(財)北海道埋蔵文化財センター2012 『木古内町 大平4遺跡(2)・蛇内2遺跡(2)』 北理調報292
(公財)北海道埋蔵文化財センター2012a 『木古内町 札蒔5遺跡』 北理調報294
(公財)北海道埋蔵文化財センター2014 『木古内町 釜谷8遺跡』 北理調報305

IV 遺構と出土遺物

1 概要

調査により検出された遺構は、土坑 (P) 2基、焼土 (F) 1か所、Tピット (TP) 3基、剥片集中域 (FC) 3か所が検出された。

土坑のうち1基、焼土、剥片集中域は、調査区南西側の亀川に向かう斜面上に位置している。Tピットは調査区中央から北東端に分布し、互いに40mほどの距離を保って独立して検出されている。なお、剥片集中域は頁岩、珪化岩の石材を使用している。遺跡は石器石材となりうる頁岩、珪化岩の分布範囲内にあることから、周囲で採取した石材を遺跡内で石器へ加工したとみられる。



図IV-1 遺構位置図

2 土坑 (P)・落とし穴 (TP)

P-1 (図IV-2、表IV-1、図版3)

位置 E45区 規模 $0.84 \times 0.76 / 0.56 \times 0.48 / 0.20\text{m}$

平面形態 楕円形

確認・調査 調査区南東側、亀川に向かう緩斜面に位置する。IV層上面を精査中に検出した。落ち込みは黒褐色土の楕円形であった。南側を半截して坑底を確認したため、土坑であることがわかった。記録を作成した後完掘して調査を終了した。遺物は出土していない。

覆土 2層に分層した。黄褐色土の粒子が少量混じる黒褐色、暗褐色土で構成されている。埋め戻されている可能性がある。

時期 不明であるが、周囲で出土している遺物から、縄文時代晩期中葉のものである可能性が高い。

P-2 (図IV-2、表IV-1、図版3)

位置 L16区 規模 $0.98 \times 0.92 / 0.46 \times 0.40 / 0.34\text{m}$

平面形態 楕円形

確認・調査 調査区北側の平坦面に位置する。IV層上面を精査中、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは明瞭な楕円形を呈していたため、南側を半截した。その結果、明瞭な壁、坑底を確認し、土坑とした。坑底は陥状である。遺物は出土していない。

覆 土 4層に分層した。全て黄褐色土粒子が混じる黒～黒褐色土である。埋め戻し土の可能性
がある。

時 期 不明であるが、覆土の色調から、縄文時代のもつとみられる。

TP-1 (図IV-2、表IV-1、図版4)

位 置 C15・16 規 模 $2.96 \times 0.44 / 2.68 \times 0.13 / 1.20\text{m}$

平 面 形 態 長楕円形

確認・調査 調査区東部の平坦面に位置する。IV層上面で遺構確認していたところ、黒褐色土の落ち
込みを確認した。短軸に合わせて半裁すると、明瞭な壁、坑底を確認した。土坑は明瞭な溝状を呈す
るが、長軸両端がオーバーハングする。遺物は出土していない。

覆 土 6層に分層した。1層はIII層相当の自然堆積、2～5層は壁面の崩落によるものとみられる
汚れた土。6層は開口時の堆積とみられる。

時 期 不明であるが、形態と周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

TP-2 (図IV-3、表IV-1、図版4)

位 置 H33、I 33・34区 規 模 $4.05 \times 2.22 / 3.46 \times 0.12 / 1.57\text{m}$

平 面 形 態 不整形

確認・調査 調査区中央部の平坦面に位置する。IV層上面を遺構確認中、黒褐色土の落ち込みを確認
した。落ち込みは不整形ではあったが概ね卵形を呈していた。そのため小型の住居、ないしは土坑を想
定し長軸に合わせトレンチを設定して掘り下げた。0.6mほど掘り下げたが、坑底は明瞭ではなく、西
側の一部が急激に落ち込んでいた。このことから、溝状のTビットが重複していることを想定し、落
ち込みの短軸にあたる部分にトレンチを設定して掘り下げた。その結果、明瞭な坑底、急激に立ち上
がる壁を検出したため、Tビットとした。土層の観察からすると、重複ではなく、堆積途中で掘り
返された可能性がある。遺物は出土していない。

覆 土 当初のトレンチ調査により層位の全体は不明であるが、12層に分層している。上位4層
はレンズ状に堆積するII～III層に相当する自然堆積である。④層～⑦層としたものは、V層起源と
みられる黄褐色土を混じる堆積である。壁面の崩落か、もしくは埋め戻しの堆積とみられる。⑧層は
開口時の堆積とみられる黒褐色土である。

時 期 不明であるが、形状から縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

TP-3 (図IV-3、表IV-1、図版4)

位 置 M24区 規 模 $2.24 \times 0.67 / 2.10 \times 0.10 / 1.12\text{m}$

平 面 形 態 長楕円形

確認・調査 調査区北側平坦面、調査境界に位置する。IV層上面を遺構確認調査中、黒褐色土の落ち
込みを検出した。落ち込みは明瞭な長楕円形を呈していたため、短軸南西側を半裁した。結果細溝状
の断面形を確認したため、Tビットとした。

覆 土 7層に分層した。上位2層はII～III層相当の自然堆積である。②～⑥層としたものは、
黒褐色土～褐色土が混じり合う壁面の崩落とみられる堆積である。

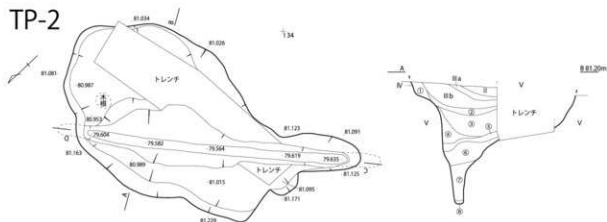
時 期 不明であるが、形状から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

3 焼土 (F)

F-1 (図IV-4、表IV-1、図版4)

位 置 I 48区 規 模 $0.52 \times 0.26 / 0.06\text{m}$

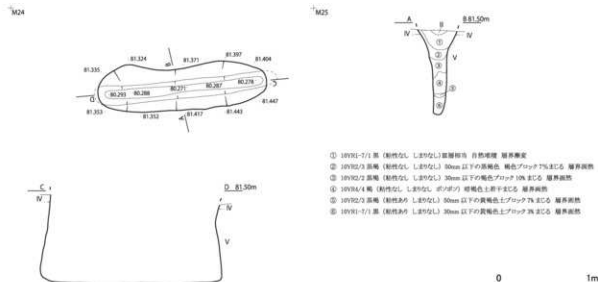
TP-2



- ① 10YR2/4 軽褐色 (粘性あり、ややしどろみあり) 層界面熟
- ② 10YR2/3 赤褐色 (粘性あり、しどろみあり) 50mm 以下の黄褐色土ブロック 10% まで
- ③ 10YR2/2 赤褐色 (粘性あり、しどろみあり) 50mm 以下の黄褐色土ブロック 10% まで
- ④ 10YR4/4 黄 (粘性あり、ややしどろみあり) 100mm 以下の黄褐色土ブロック 10% まで
- ⑤ 10YR2/2 赤褐色 (粘性あり、ややしどろみあり) 100mm 以下の黄褐色土ブロック 10% まで
- ⑥ 10YR2/3 赤褐色 (粘性あり、ややしどろみあり) 20mm 以下の黄褐色土粒 10% まで
- ⑦ 10YR2/3 赤褐色 (粘性あり、しどろみなし) 20mm 以下の黄褐色土粒 10% まで
- ⑧ 10YR2/2 赤褐色 (粘性あり、しどろみなし) 層界面熟



TP-3



- ① 10YR1-7/1 黒 (粘性なし、しどろみなし) 黒層相汚 自然堆積 層界面熟
- ② 10YR2/3 赤褐色 (粘性なし、しどろみなし) 50mm 以下の黄褐色 褐色ブロック 7% まで
- ③ 10YR2/2 赤褐色 (粘性なし、しどろみなし) 30mm 以下の黄褐色土ブロック 10% まで
- ④ 10YR6/1 黄 (粘性なし、しどろみなし) の砂の 程度色土層である
- ⑤ 10YR2/3 赤褐色 (粘性あり、しどろみなし) 50mm 以下の黄褐色土ブロック 7% まで
- ⑥ 10YR1-7/1 黒 (粘性あり、しどろみなし) 30mm 以下の黄褐色土ブロック 7% まで

図IV-3 遺構 (2)



確認・調査 調査区南西端の亀川に向かう斜面に位置する。Ⅲ層を調査中、焼土粒の混じる黒褐色土の範囲を検出した。遺構の重複を想定して台状に残して周囲をⅤ層まで掘り下げた。結果重複ではなく風倒木の影響による層位の乱れを確認した。焼土はそれに伴うⅢ層の落ち込みに伴うものである。
遺物出土状況 焼土の西側に接してデイサイトの礫片が出土している。炉石の可能性のあるものとして取り上げたが、関係は不明である。

時期 不明であるが、周囲で多く出土している縄文時代晩期中葉のものである可能性がある。

4 フレイク・チップ集中域 (FC)

FC-1 (図IV-4・5、表IV-1・2、図版5・6)

位置 I 45・46区 **規模** 3.46×2.48m

確認・調査 調査区南西側平坦面に位置する。表土を除去しⅢ層上面を精査中、剥片の若干のまとまりを検出した。精査して範囲を囲み、石器を含むⅢ層を大きく残して周囲を掘り下げた。この集中範囲をフレイクチップ集中域とした。集中域は3か所で、等高線に沿う形で分布する。約0.6m南西にFC-2、北西に2.3m離れてFC-3が位置する。

遺物出土状況 暗褐色を呈する珪化岩の剥片を主とする。Rフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク417点が出土している。石材はR、Uフレイク、フレイク2点の計4点が頁岩である他415点が珪化岩である。フレイク1点あたりの重量は、珪化岩が7.76g、頁岩が13.19gである。

時期 不明であるが、周囲の風倒木より石礫が出土している (図IV-7-2)。形状から縄文時代早期もしくは前期前半とみられるもので、本遺構に伴う可能性がある。このことから縄文時代早期～前期の可能性のあるものとしておく。

掲載遺物 1はRフレイクである。剥片の端部に意図の不明瞭な二次加工がみられる。頁岩製。2はUフレイク。原石面の残る縦長剥片を用い、左側縁に微細な剥離痕が認められるもの。3はFC-1のフレイク11点と、FC-2のフレイク2点、包含層I 46のフレイク1点、計14点の接合資料である。図の右側に大きく原石面を残しており、原石の大きさは一辺30cm以上あったものと想定される。剥離面にはリング状の痕跡も認められるが、縦横に走る節理により剥離順を読み取ることはできなかった。おそらく一打ごとに大きく節理割れをおこしたものとみられる。26×11.4×6.2cm、重さは893.6gである。

FC-2 (図IV-4・5、表IV-1・2、図版5・6)

位置 I 46区 **規模** 1.64×0.84m

確認・調査 調査区南西側平坦面に位置する。約0.6m北東にFC-1北に2.4m離れてFC-3が位置している。

遺物出土状況 フレイク74点からなる集中域である。石材は頁岩が1点、珪化岩が73点である。1点あたりの重量は、頁岩が0.57g、珪化岩が14.38gである。

時期 不明であるが、FC-1と接合する資料があるため、FC-1と同時期のものである可能性が高い。よって縄文時代早期～前期の可能性がある。

掲載遺物 4はたたき石。礫の平坦面に敲打痕があるもの。デイサイト製。

FC-3 (図IV-4、表IV-1、図版5)

位置 J 46区 **規模** 2.00×1.54m

確認・調査 調査区南西側平坦面に位置する。約2.3m南東にFC-1、南に2.4m離れてFC-3が位置している。

遺物出土状況 フレイク154点からなる集中域である。石材は頁岩が3点、珪化岩が151点である。1点あたりの重量は、頁岩が1.90g、珪化岩が5.17gである。

F-1

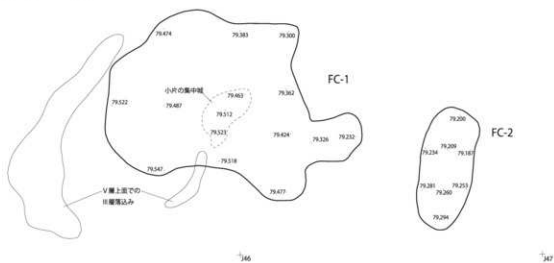


↑149



① 7.5002/2基輪 (耐性G.L. 2.8502L) 掘土前 同化物 28.82C 掘削断面

FC-1 ~ 3



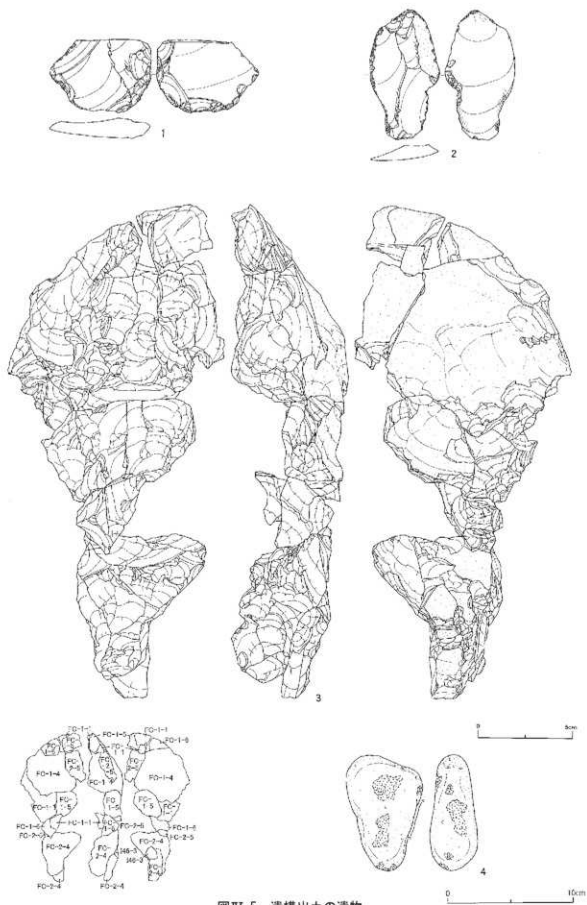
↑146

↑147

↑146

図IV-4 遺構 (3)





図IV-5 遺構出土の遺物

表IV-1 遺構一覧

遺構名	位置(調査区)	幅(断面)×長さ	平面形	時期	出土遺物	その他特徴
P 1	E-3	0.84×0.76×0.56×0.48×0.29	楕円形	晩期中葉	なし	亀川に向かう傾斜面で検出
P 2	L16	0.96×0.92×0.46×0.40×0.34	楕円形	縄文	なし	北側平坦面で検出
TP 1	CB・16	2.96×0.44×2.68×0.13×1.20	長楕円形	後期前葉か	なし	長輪郭がオーバーハングする
TP 2	HB、I33・34	4.05×2.22×3.46×0.12×1.57	不整形	後期前葉か	なし	崩り返されている可能性あり
TP 3	M24	2.24×0.67×2.10×0.10×1.12	長楕円形	後期前葉か	なし	小形、長径約2分の1
F 1	148	0.52×0.26×0.06	-	晩期中葉	鏡片×2	鏡片はデザイン製
FC 1	145・46	3.46×2.48	-	早期～前期か	Rフレイク×1, Uフレイク×1, フレイク×417, 鏡片×1	同一グリップ下層樹木より 早期～前期の石鏝出土
FC 2	146	1.84×0.84	-	早期～前期か	フレイク×74, 太たき石×1, 鏡×1	FC-1と接関係あり
FC 3	146	2.00×1.54	-	縄文	フレイク×154	遺構間接合なし 詳細時期不明

表IV-2 接合作業結果一覧

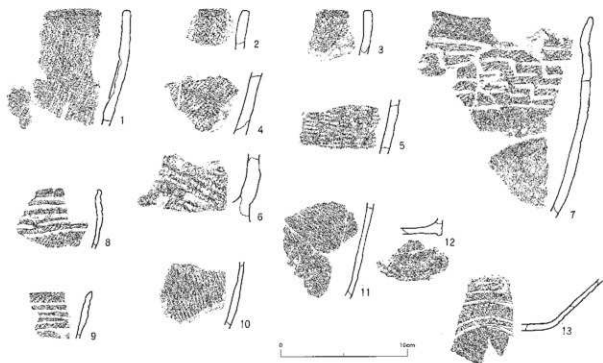
接合番号	遺構・包含層	層位	点数	分類	合計重量 (g)	接合番号	遺構・包含層	層位	点数	分類	合計重量 (g)
001	FC-1-1	Ⅲ	1	F	145.6	016	FC-1-1	Ⅲ	1	F	30.1
	FC-1-4	Ⅲ	2	F			FC-1-6	Ⅲ	1	F	
	FC-1-5	Ⅲ	2	F			合計	2	点		
002	FC-1-4	Ⅲ	1	F	171.2	017	FC-1-1	Ⅲ	2	F	9.6
	FC-2-5	Ⅲ	1	F			合計	2	点		
	合計	2	点				FC-1-1	Ⅲ	1	F	
003	FC-2-5	Ⅲ	1	F	105.7	018	FC-1-6	Ⅲ	1	F	13.6
	146-4	Ⅲ	2	F			合計	2	点		
	合計	3	点				FC-1-1	Ⅲ	2	F	
004	FC-1-1	Ⅲ	1	F	11.5	019	合計	2	点	3.7	
	FC-2-5	Ⅲ	1	F			FC-1-6	Ⅲ	1		F
	合計	2	点				FC-2-4	Ⅲ	1		F
005	FC-1-5	Ⅲ	1	F	174.9	020	146-3	Ⅲ	1	F	530.5
	FC-1-6	Ⅲ	3	F			合計	3	点		
	FC-2-5	Ⅲ	1	F			FC-1-1	Ⅲ	5	F	
006	FC-1-1	Ⅲ	7	F	173.1	021-1	FC-1-4	Ⅲ	1	F	551.2
	FC-1-6	Ⅲ	1	F			FC-1-5	Ⅲ	1	F	
	146-3	Ⅲ	1	F			FC-1-6	Ⅲ	1	F	
007	FC-1-1	Ⅲ	1	F	54.2	021-2	FC-2-4	Ⅲ	2	F	41
	FC-2-5	Ⅲ	2	F			FC-2-5	Ⅲ	1	F	
	合計	3	点				146-3	Ⅲ	1	F	
008	FC-1-1	Ⅲ	2	F	63.2	022 (図IV-5-3)	合計	14	点	893.6	
	FC-1-4	Ⅲ	1	F			FC-1-1	Ⅲ	4		F
	FC-1-5	Ⅲ	4	F			FC-1-4	Ⅲ	1		F
009	FC-2-5	Ⅲ	1	F	23.6	023	FC-1-5	Ⅲ	2	F	46
	合計	2	点				FC-1-6	Ⅲ	2	F	
	FC-1-1	Ⅲ	2	F			FC-2-4	Ⅲ	2	F	
010	FC-1-1	Ⅲ	1	F	30	024	FC-2-5	Ⅲ	2	F	10.2
	148-2	Ⅲ	1	F			FC-2-5	Ⅲ	2	F	
	合計	2	点				146-3	Ⅲ	1	F	
011	FC-1-1	Ⅲ	2	F	8.6	025	合計	14	点	893.6	
	FC-1-4	Ⅲ	1	F			FC-2-5	Ⅲ	2		F
	合計	3	点				合計	2	点		
012	FC-1-6	Ⅲ	2	F	27.7	026	FC-3-2	Ⅲ	2	F	5
	合計	2	点				FC-1-4	Ⅲ	1	F	
	FC-3-2	Ⅲ	2	F			FC-1-5	Ⅲ	1	F	
013	FC-3-2	Ⅲ	2	F	18.6	027	合計	2	点	4.8	
	合計	2	点				FC-3-2	Ⅲ	3		F
	FC-1-1	Ⅲ	2	F			合計	3	点		
014	FC-1-1	Ⅲ	2	F	27.2	015	合計	2	点	44.1	
	合計	2	点				FC-3-2	Ⅲ	2		F
	FC-3-2	Ⅲ	2	F			合計	2	点		

時期 不明であるが、縄文時代のものとみられる。FC-1・2との接合関係は認められない。

5 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図IV-6・9、表IV-3、図版6)

包含層から出土した土器は138点である。内訳はIV群a類土器が95点、V群b類土器が43点である。詳細はIV群a類土器が甬元式、入江式とみられるもの、V群b類が聖山I～II式とみられるものである。以下に掲載遺物について詳細を述べる。



図IV-6 包含層出土の土器

表IV-3 掲載土器一覧

図番号	接合	計	同一個体未接合	計	分類
図IV-6-1	F42-4Ⅲ×7	計7	F42-4Ⅲ×6	計6	IVa
図IV-6-2	F42-4Ⅲ×1	計1			IVa
図IV-6-3	F42-4Ⅲ×1	計1			IVa
図IV-6-4	F42-4Ⅲ×2	計2			IVa
図IV-6-5	F37-2Ⅲ×1	計1			IVa
図IV-6-6	B41-1Ⅲ×1	計1	B41-1Ⅲ×47	計47	IVa
図IV-6-7	F33-1Ⅲ×7	計7	C44-1Ⅲ×1, F31-1Ⅲ×1, F32-2Ⅲ×1	計3	IVa
図IV-6-8	H28-1Ⅲ×2	計2			Vb
図IV-6-9	H34-1Ⅲ×1	計1			Vb
図IV-6-10	D46-1Ⅲ×1	計1			Vb
図IV-6-11	D46-1Ⅲ×3, D46-2Ⅲ×1	計4	D46-1Ⅲ×12, D46-2Ⅲ×7	計19	Vb
図IV-6-12	D46-1Ⅲ×2	計2			Vb
図IV-6-13	H34-1Ⅲ×3	計3	H34-1Ⅲ×3	計3	Vb

IV群a類土器 (図IV-6-1~7、表IV-3、図版6)

総数95点は調査区南西側～南側にかけての緩斜面に分布している。F33区で入江式がややまとまっているが、その他は涌元式に相当するとみられる縄文を主とする土器である。1は深鉢の口縁部。口縁はやや内傾し、上端には平坦面がある。細かいLRL複節の斜行縄文が器面全体に施されている。2～4も同一個体の可能性がある。2、3は口縁部。4は胴部片。垂下する沈線がつけられる。全体の文様構成は不明である。5は底部付近とみられる胴部。LR斜行縄文。条が横走するようにつけられている。6も底部付近の破片。やや節の粗いRL斜行縄文を地紋とする。7はF33区でまとまって出土したもの。小形の深鉢である。胴部上半がやや張り出しわずかに口縁部が外反する器形である。胴部上半から頭部にかけて磨消縄文がみられる。LR斜行縄文のち二条の沈線で区画した部分に「乙」字状の沈線が横位に連続して二列つけられている。なお口唇内面にも一部沈線がみられるが、炭化物が付着しており全体は不明である。1～6は涌元式、7は文様構成から入江式に相当するとみられる。

V群b類土器 (図IV-6-8~13、表IV-2、図版6)

95点出土している。IV群a類土器と同様に調査区南西側～南側にかけての緩斜面に分布する。8、9は浅鉢の口縁部。8の頭部には無紋地に幅広の平行沈線が3条加えられている。沈線の下端に接してA状突起がつけられている。突起の下位にはさらに縄文地に沈線が1条めぐらされている。地紋はLR斜行縄文。9は口頭部のみ破片。無紋地に幅広の平行沈線が3条つけられる。沈線より下は磨消縄文による文様が描かれている。地紋はLR斜行縄文。10、11は胴部片。いずれも薄手でLR斜行縄文を地紋とする。12はやや上底の底部。11と胎土がよく似ており、同一個体かもしれない。13は浅鉢の底部付近。LR縄文地に間隔のあく器体に平行な4条の沈線が施されている。破片により文様は不明である。8～13は聖山Ⅰ～Ⅱ式に相当するものとみられる。なお、V群土器の分類において、当センターが通常用いる大洞各型式を基準とした分類を行わなかった。小片であるため分類上の限定を避ける。年報等先行する文を上記のように訂正する。

(2) 石器等 (図IV-7~11、表IV-3、図版7)

出土グリッドを限定できない表採資料を含め、包含層から出土した石器等の総点数は、258点である。フレイクが173点で最も多く、剥片石器ではスクレイパーが19点、つまみ付きナイフが5点、石鏃が3点となっている。

石鏃 (図IV7-1~3、図版7)

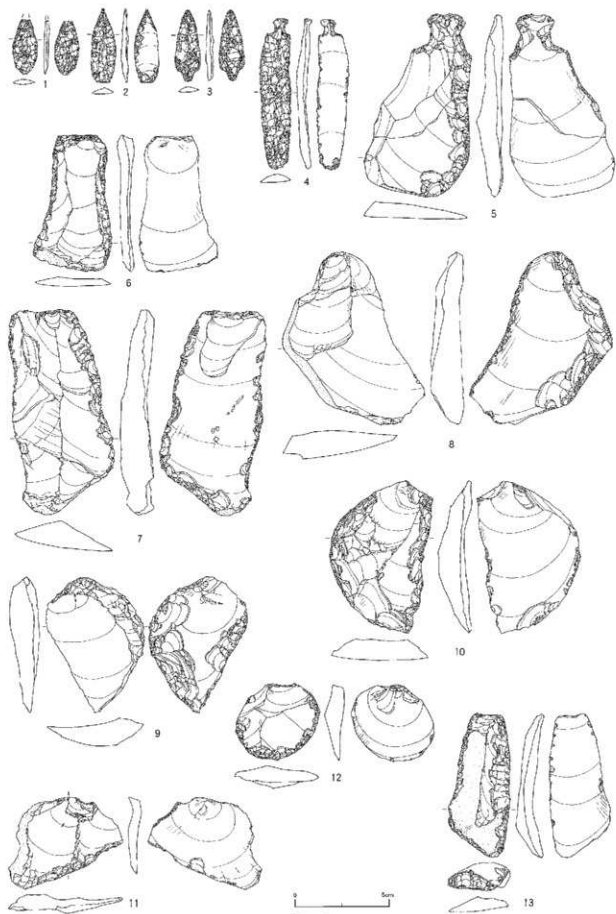
3点出土している。全て図化した。1は木葉形を呈するもの。先端を欠損する。背腹両面に丁寧な細部調整がなされる。黒曜石製。2は基部が平らなもの。背面全面と腹面側縁に細部調整がみられる。頁岩製。FC-1に隣接グリッドから出土している。3は基のつくもの。背腹両面に丁寧な細部調整がなされる。かえしは不明瞭である。珪化岩製。2以外は表採されたもの。

つまみ付きナイフ (図IV-7-4・5、表IV-4、図版7)

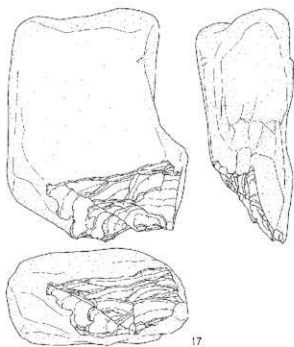
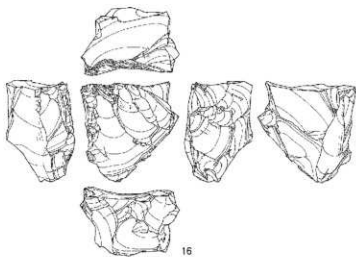
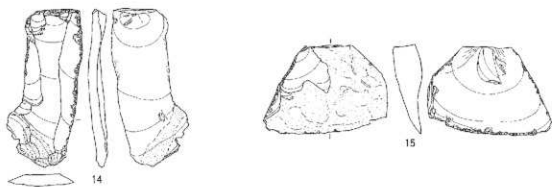
破片も含め5点出土している。内破片以外の2点を図化した。4は縦長剥片の背面のみ細部調整されるもの。端部側に素材剥片の打点がある。つまみ部は比較的丁寧に作出されている。5は縦長剥片の打点側につまみ部を作出し、背面右側縁が細部調整されるもの。二片に破損している。未成品の可能性もある。4、5ともに頁岩製。

スクレイパー (図IV-7-6~13、表IV-4、図版7)

破片も含め19点出土している。うち8点を図化した。6、7は縦長剥片を用い、主として直線状の刃部が作出されるもの。いずれも素材剥片の端部に原石面が残る。6は腹面両側縁に、7は腹面右側縁に、使用によるとみられる光沢が認められる。8～10は刃部の反対側縁に粗い加工が施される。刃



図IV-7



图IV-8

部は概ね直線状を呈するが、8はやや内湾する。8と10は刃部腹面側に明瞭な光沢が認められる。11は横長剥片を素材とするもの。やや薄手で刃部は直線状である。12は楕円形を呈する素材剥片を用い、背面の周縁に細部調整される。13は原石面の残る縦長剥片を用い、背面の周縁に細部調整がみられる。剥片端部に急角度の刃部が作出されている。6～13は全て頁岩製。

Rフレイク

9点出土しているが、図化したものはない。剥片に意図の不明な再加工がみられるものである。

Uフレイク (図IV-8-14・15、表IV-4、図版7)

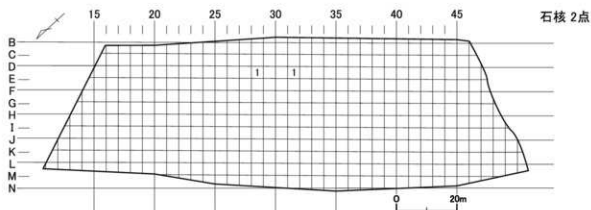
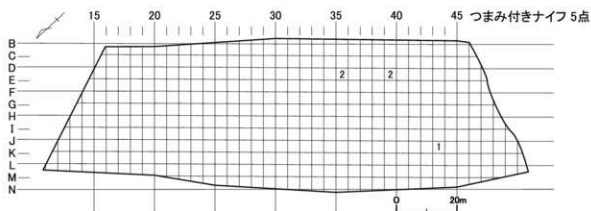
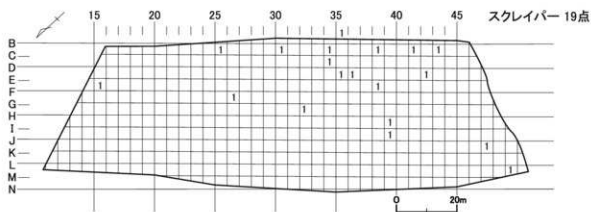
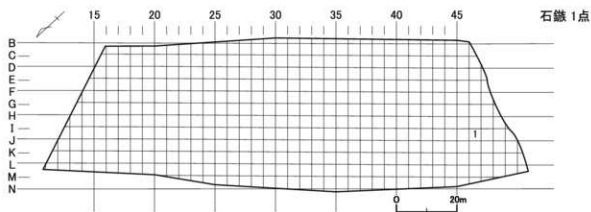
10点出土している。2点図化した。14、15はいずれも素材剥片の原石面を残す。14は縦長剥片を素材とし、背面左側縁に微細な剥離痕が認められる。15は横長剥片を素材とし、端部に微細な剥離痕が認められる。

石核 (図IV-8-16・17、表IV-4、図版7)

2点出土し、全て図化した。16は三角柱状のもの。17はやや角のある頁岩礫の端部に、剥離痕があるもの。加工痕のある礫とするべきかもしれない。16、17は頁岩製である。

表IV-4 掲載石器一覧

図番号	グリッド	番号	層位	遺物 番号	石器	石材	点数	日付	長さ	幅	厚さ	重量	備考
図IV-5-1	FC	1	Ⅲ	3	Uフレイク	sh	1	2014/9/11	6.78	3.65	0.95	16.61	グリッドI-46
図IV-5-2	FC	1	Ⅲ	2	Rフレイク	sh	1	2014/9/3	5.32	3.82	1.23	28.27	グリッドI-45
図IV-5-4	FC	2	Ⅲ	2	たたき石	Da	1	2014/9/3	9.08	5.96	3.72	205.00	グリッドI-46
図IV-7-1	表採			7	石鏃	obs	1	2014/8/18	2.84	1.30	0.27	1.07	SP26400付近
図IV-7-2	I	46	Ⅲ	2	石鏃	sh	1	2014/9/16	3.87	1.29	0.32	1.81	風例
図IV-7-3	表採			6	石鏃	sw	1	2014/9/18	3.73	1.32	0.36	1.75	
図IV-7-4	J	43	Ⅲ	1	つまみ付きナイフ	sh	1	2014/8/8	7.87	1.64	0.53	7.07	
図IV-7-5	D	35	Ⅲ	3	つまみ付きナイフ	sh	2	2014/8/28	9.55	5.40	1.32	51.96	
図IV-7-6	H	39	Ⅲ	1	スクレイパー	sh	1	2014/9/15	7.11	4.08	0.88	20.12	
図IV-7-7	B	34	Ⅲ	1	スクレイパー	sh	1	2014/8/25	10.73	5.53	1.62	79.56	
図IV-7-8	E	15	Ⅲ	1	スクレイパー	sh	1	2014/9/26	9.03	7.51	1.67	81.44	
図IV-7-9	B	38	Ⅲ	2	スクレイパー	sh	1	2014/8/25	7.10	5.11	1.49	42.02	
図IV-7-10	D	36	Ⅲ	1	スクレイパー	sh	1	2014/8/26	8.01	5.40	1.40	57.55	
図IV-7-11	D	35	Ⅲ	2	スクレイパー	sh	1	2014/8/28	4.82	5.95	0.70	14.02	
図IV-7-12	L	49	Ⅲ	3	スクレイパー	sh	1	2014/8/21	3.97	4.41	1.04	15.23	
図IV-7-13	G	32	Ⅲ	1	スクレイパー	sh	1	2014/8/27	7.53	3.19	1.07	22.25	
図IV-8-14	C	32	Ⅲ	1	Uフレイク	sh	1	2014/8/26	8.31	3.94	0.70	24.70	
図IV-8-15	C	37	Ⅲ	1	Uフレイク	sh	1	2014/8/26	4.61	6.50	1.53	35.93	
図IV-8-16	D	28	Ⅲ	1	石核	sh	1	2014/9/26	5.32	5.20	3.57	77.70	
図IV-8-17	D	31	Ⅲ	1	石核	sh	1	2014/8/27	12.32	9.55	5.04	740.00	



図IV-10 グリッド別遺物出土状況 (2)

写真図版



調査風景（北東から）



調査風景（北から）

図版3



A地区完掘（北から）



B地区完掘（北から）



P-1 土層断面 (南から)



P-1 完掘 (西から)



P-2 土層断面 (南西から)



P-2 土層断面 (東から)



TP-1 土層断面 (南から)



TP-1 完掘 (南から)

図版4



TP-2 土層断面 (南西から)



TP-2 完掘 (南東から)



TP-3 土層断面 (南東から)



TP-3 完掘 (南から)



F-1 検出 (南から)



F-2 土層断面 (南から)



FC-1 調査風景 (東から)

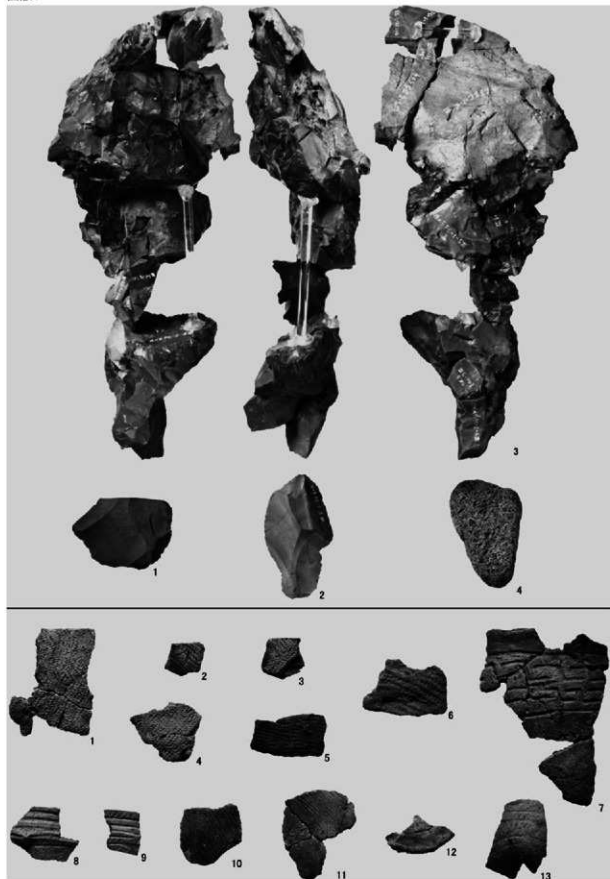


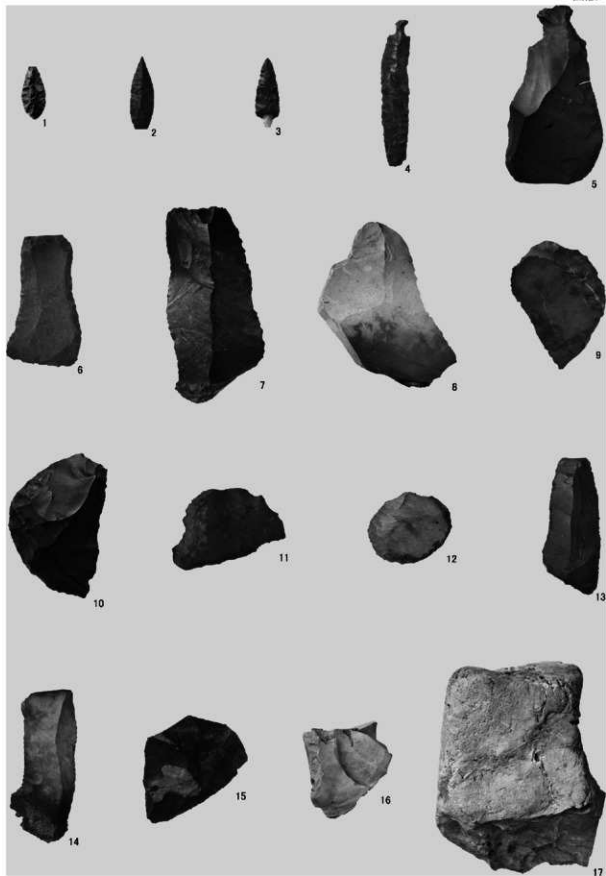
FC-2 検出 (南から)



FC-3 検出 (北西から)

图版6





報告書抄録

ふりがな	きこないちよう かめかわ5いせき							
書名	木古内町 亀川5遺跡							
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北理調報)							
シリーズ番号	第332集							
編著者名	梶川洋一、立田 理							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 Ⅲ 011-386-3231							
発行年月日	平成29 (西暦2017) 年3月24日							
ふりがな 収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
亀川5遺跡	北海道 かみこち 上磯郡 木古内町 字亀川220- 2、227-2	01334	B-05-54	41° 42′ 43″	140° 31′ 10″	20140801 ～ 20141031	6,474㎡	高規格幹線道路 函館江差自動車 道建設に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
亀川5遺跡	遺物包含地	縄文時代後期前葉 縄文時代晩期中葉		土坑×2 焼土×1 Tピット×3 フレイク・チップ集中域×3		後期：涌元 晩期：壺山Ⅰ～Ⅱ		なし
要約	遺跡はサラキ岬の西側を南東側に下刻して流れる亀川の左岸に位置する。標高は85m前後で、川からは500m、海岸線からは1km内陸に位置する。 検出遺構は土坑2基、Tピット3基、焼土1か所、フレイクチップ集中域3か所である。 遺物は1,084点出土し、縄文時代後期前葉、晩期中葉の土器、およびそれに伴うとみられる石器等が出土している。							

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号、経緯度は世界測地系による。

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第332集

木古内町亀川5遺跡

— 高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成29（2017）年3月24日発行

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印刷 北海道印刷企画株式会社
〒064-0811 札幌市中央区南11条西9丁目3番35号
TEL 011(562)0075 FAX 011(562)0355
[URL] <http://www.hpp-c.jp>
[E-mail] info@hpp-c.jp

